

エッセイ

創立二五周年を迎えて

小松 和彦

日文研は、今年の五月二一日に二五周年の折り返しを迎え、初代所長の梅原猛顧問や杉本秀太郎先生ら草創期にかかわった先輩諸先生にも参加いただき、ささやかながらも記念の式典も開かせていただきました。

日文研では、これまで十周年、二〇周年の折り返しに、それぞれ記念の国際研究集会を開催しており、その流れでいけば、三〇周年にあたる年に、また記念の行事を計画するのが適当なのかもしれません。しかし、今回、二五周年記念と銘打った会を設けることになったのは、猪木武徳前所長の下で取り組んできた『日文研二五年史——資料編——』が完成したことによりです。つまり、この会は、じつはこの年史を披露するとともにこれを祝う会も兼ねていたわけです。

二五年史の編さんの必要性を提言したのは、白幡洋三郎教授と私でした。これまで日文研は、本格的な年史が作製されておりませんでした。これまでそれを作らなかつた理由もそれなりにあったようですが、私たちはその時と今とでは日文研が置かれている状況が大きく変化し

つつあるという認識を抱いております。というのも、草創期からの教員が次々に退職し、日文研の歴史を知らない教員が大半を占めるようになってきていたからです。数年もすれば、草創期の日文研の歴史を体験した教員はほとんどいなくなるという状況が迫っているのです。

しかも、日文研の設立にあつてはいろいろと外部から誤った批判がなされたという経緯もありました。したがって、日文研の内外に、たしかな資料に基づいて、その経緯を知る方々に確認をとりながら、日文研の可能な限り正確な歴史を記し示すことは、急務の課題となつていたのです。

もっとも、二五年にも及ぶ歴史を、限られた紙面で書き尽くすことは不可能です。できあがつた『資料編』には、書き留めて置かねばと思ひながらも断念した事項もあれば、さまざまなる理由で描くことをあえて控えたこともあります。これらのことは、今年度中には二五年史の物語編として刊行を予定している『日文研物語』（仮題）で、一部は披露されるはずですが、そこからもこぼれ落ちたことについては、次世代にしっかり申し送りをして、いつかは書き記して欲しいと思います。

『資料編』の頁をばらばらと繰りながら感じるのは、この二五年の間に、自画自賛になりませんが、日文研はじつに多様な活動をしてきたということの驚きです。国内外の学界のみならず、社会に対しても多大な文化的貢献をしてきております。このことは、たとえば四人もの文化功労者を輩出してきていることからもおわかりいただけるものと思ひます。そうしたこれまでの実績を前にして、私ども現在の所員はこれからもこの実績を汚すことがないよう、地道かつ大胆に活動を展開して行かなければならないとの決意を新たにいたします。

創立時における日本および国内外の日本研究の状況は大きく変わっています。日文研もそれ

に合わせて変わってきました。しかし、忘れてはならないことも多々あります。二五周年を記念して刊行されたこのたびの年史を参考にしながら、これからの日文研の役割をしっかりと再考し、さらなる飛躍に挑戦していきたいと考えております。

今後もし心温かいご助言、ご支援を賜りたいと思います。

(国際日本文化研究センター所長)

二五年史座談会を企画して

瀧井 一博

日文研は本年二〇一二年に創立二五周年を迎えたが、それを記念して資料編と物語編の二冊の年史を刊行することになった。その編纂室長を拜命した私は、これを機に所員全員が参加して二五年を振り返り今後の展望を語り合う座談会を開催してはどうかと考え提案したところ、編纂室や所員会で賛同を得ることができ、昨年の二月から五月までの毎月一回のペースで会が催された。

この企画を立てた理由として、私が木曜セミナーの幹事も兼ねていたため、これが実現したらその分、木セミの配役に頭を悩ます必要がなくなるといふ邪な思いがあったことはまず正直に告白しておこう。だが、動機に多少の不純さはあっても、蓋を開けてみればこの企画は好評